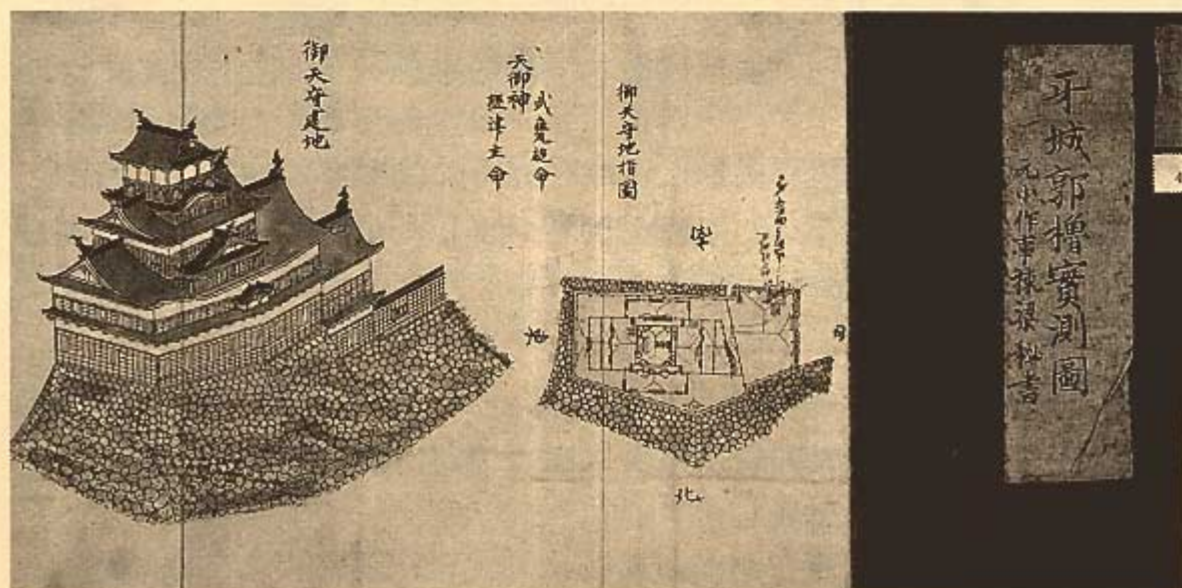


池田家文庫等貴重資料展

絵図にみる岡山城

期間：平成9年10月24日(金)～11月2日(日)

会場：岡山大学附属図書館 特殊資料展示室



岡山大学附属図書館

1997

御 挨 拶

このたび岡山大学附属図書館では、「池田家文庫等貴重資料展—絵図にみる岡山城」を開催することになりました。

本学附属図書館は、旧岡山藩主の池田家文庫のほか、1つの藩政史料、18の地方史料を所蔵していますが、これまで10のテーマについて、この貴重資料展を開催して参りました。今年は岡山城築城400年にあたり、さまざまな記念行事が催されています。このたびは、藩政史研究上第一級の史料である池田家文庫のなかの岡山城に関する多数の史料のうち、絵図を中心として、岡山城についての展示をいたすことにしました。ご覧いただき、岡山城についての理解を深めていただければ幸いです。

今や大学は社会から隔絶された存在であることは許されず、大学は広く社会に開放され、その研究成果を社会に還元することが求められています。岡山大学は全学をあげてその努力をしています。附属図書館においては、所蔵する図書資料を市民の閲覧に供じています。広く利用していただけるように所蔵する池田家文庫藩政史料のマイクロフィルム化を行い、また絵図のデータベース化を行いつつあります。そしてこのような大学の所蔵する貴重な史料を地域の方々に公開して参りました。

中央図書館は狭隘となり、老朽化していましたが、幸い、本年、新館が完成し、既設部分も装いが新たとなりました。このたびの資料展をこの新しい展示室で行えますことを悦ばしく思っております。

今回の資料展開催にあたり、教育学部 上原 兼善教授、文学部 倉地 克直教授、同 久野 修義助教授に多大なご援助、ご協力をいただきました。ここに記して謝意を表します。

どうぞ、ゆっくりご覧ください。

平成9年10月

岡山大学附属図書館長

神 立 春 樹

[解説]

1997年（平成9）は、宇喜多秀家が岡山城天守閣を完成させた1597年（慶長2）から400年後にあたり、様々な記念行事が行われている。池田家文庫のなかにも、岡山城に関する史料が多数含まれており、そのうち興味深いものを展示した。これを機に、岡山城についての理解を深めていただければ幸いである。

I. 岡山築城と城下町

岡山築城について直接に示す史料は乏しい。16世紀の戦国時代には、金川の松田氏に仕えていた金光氏が石山に城を構えていたと伝えられている。この金光氏は宇喜多直家によって亡ぼされ、直家は居城を石山に移して、ここを領国経営の拠点とした。

岡山城および城下町が形を整えたのは、直家の子の秀家の時代であった。1591年（天正19）秀家は秀吉の意見に従い城郭の拡張工事に着手、本丸を石山から東方の現在地に移した。その後二度の朝鮮出兵などにより工事は遅れたが、1597年（慶長2）に天守閣が完成し、岡山城の規模は整った。

しかし、1600年（慶長5）の関ヶ原の戦いで宇喜多秀家は敗れ、領地を没収された。岡山城へは小早川秀秋が入った。秀秋は外堀など城郭の強化を計ったが、1602年（慶長7）に急死したため、姫路城主池田輝政の二男忠継が岡山に封ぜられた。さらに、1615年（元和元）忠継が死亡すると、弟の忠雄が淡路から移された。この忠雄の時代に城郭・城下町の整備がほぼ終了したと考えられる。

1632年（寛永9）忠雄がなくなると、その子光仲と鳥取藩主池田光政との間で国替えが行われた。光政は、忠継の後見として岡山城に住した池田利隆（後に輝政の遺領を継いで姫路城主となる）の長男で、1609年（慶長14）岡山城で生まれている。1617年（元和3）より鳥取に住したが、故郷に帰ることになったわけである。以後廃藩まで光政の子孫が岡山城主として続いた。

II. 岡山城内の建物

岡山城は東に旭川を控え、西側を外堀・中堀・内堀という三重の堀で囲われていた。内堀の内側が内山下で、内堀から引き込まれた堀によって、二の丸・西の丸・本丸に区画されていた。このうち本丸が岡山城の中核部分で、角櫓と多聞櫓によって囲まれていた。

本丸の内部には石垣によって築かれた高い段があり、本段と中の段に分かれていた。中の段には表書院、本段には御殿と天守閣があった。このうち天守閣は、関ヶ原の戦い以前の天守閣遺構として貴重なものであったが、1945年（昭和20）戦災によって焼失した。現在の鉄筋コンクリート造りの建物は、1966年（昭和41）に再建されたものである。

Ⅲ. 城郭の修復

武家諸法度の定めにより、城郭・石垣の建築・修理には幕府の許可が必要であった。特に時を経るに従って石垣などの老朽化が進み、18世紀になると破損修復願がしきりに出されるようになった。

Ⅳ. 廃藩後の岡山城

1869年（明治2）の版籍奉還により岡山城内山下は国有地となり、陸軍省の管轄となった。1873年（明治6）の廃城令によって全国の多くの城郭が破却されたが、軍事上必要とされた岡山城などは存続させることとなった。しかし、1882年（明治15）には多くの櫓・門が破却され、天守閣・月見櫓・西丸西手櫓・石山門が残された。その後陸軍省の方針変更により、軍事施設として未使用の城地は旧藩主に払い下げられることとなり、1890年（明治23）岡山城は池田章政^{あきまさ}に払い下げられた。

岡山城内の一部は、第三高等中学校医学部（後に岡山医学専門学校→岡山医科大学）や岡山第一中学校の敷地として借用された。また、1931年（昭和6）に天守閣が、33年（昭和8）には月見櫓・西丸西手櫓・石山門が、それぞれ国宝に指定された。しかし、1945年（昭和20）6月29日の岡山大空襲によって、天守閣と石山門は焼失した。

【展示史料解説】

1 備前軍記（『吉備温故秘録』[貴2-4] 所収）

1774年（安永3） 24.2×16.6

1441年（嘉吉元）の赤松氏滅亡から1603年（慶長8）の池田氏入部までの備前国内での争闘の歴史を記したもの。全5巻。著者は岡山藩士の土肥経平^{とひのりひら}で、1774年（安永3）8月20日の序がある。大沢惟貞^{おおさわこれさだ}の『吉備温故秘録』は、紀事四～八に、これを収めている。

金光氏が岡山に居城する以前、正平年間（1346～1370）の始めの頃に、南朝方^{うわがみ}の上神太郎兵衛高直^{たろべえたかなお}が居城したと記されている。

巻三のうち「宇喜多金光与次郎宗景を殺す事」、巻四のうち「宇喜多直家岡山城へ移る事」、巻五のうち「岡山城改て築添る事」の3ヶ所を展示した。

2 備陽国志（217-11）

1739年（元文4） 25.7×19.1

池田継政^{つぐまさ}が和田弥兵衛^{わだやへえ}（省齋^{せいさい}）ら藩学校の教授たちに編纂^{へんさん}を命じた地誌。13巻。池田家文庫には13冊本と5冊本とがあるが、ここでは後者を展示している。

巻二城府に岡山城の由来が簡潔に記されている。応仁の乱の頃、岡山にあった西軍山名方の城を赤松政則^{まさのり}が攻め落としたという言い伝えは、諸書に見えず疑わしいとしている。

3 備前国九郡古図 (※T1-14) [複製]

(原本は 193.4×188.5)

1632年(寛永9)池田光政が鳥取から岡山へ転封となり、以後その子孫が代々岡山城に住した。この国絵図は「寛永古図」として伝えられるもので、岡山人封からしばらく後の1638年(寛永15)頃に作成されたと考えられている。

村は郡別に色分けされた小判形で示され、内に村名と村高が記されている。道路・海路は朱線で、郡境は金泥で描かれ、道路・海路には行先などの簡単な注記が付されている。山は南から北へ見た一方向で基本的に描かれており、より古い描写様式を示している。岡山には五層の天守閣が単純化して描かれている。

展示したものは、原図を60/100に縮小した複製である。

4 御納戸大帳 (E1-1)

27.9×20.3

岡山藩政確立期の幕府法令および岡山藩独自の重要な法令を収録したもの。法令の出された年次は、1630年(寛永7)から68年(寛文8)までである。1632年(寛永9)の岡山転封にあたって出された法令も多い。

展示した個所は、右側は1632年(寛永9)6月10日付の「御横目衆御越之時之覚」の後半部分で、鳥取城引き渡しに際して出された法度。左側は、6月13日付の書付で、岡山城請け取りに際して城中および内山下・外山下の番等の役割を書き上げたもの。家老の伊木長門・池田伊賀らは7月16日に岡山城を請け取り、光政も8月12日に入城した。

5 岡山城下切絵図 (※T6-8~11)

4枚1組 128.0×220.8

岡山の城下町は、宇喜多秀家の時代に本格的な建設が始まり、池田忠雄の時代に後のような規模に整備されたと考えられる。1632年(寛永9)入封した池田光政は、その城下町を受け継いだ。

この絵図は、岡山城下を四つに分割した切絵図で、川西の城下町を南部(大雲寺以南二日市ニ至ル図)、中央部(北城内柳屋町ヨリ南大雲寺町通ニ至ル図)、北部(柳屋町通以北番町ニ至ル図)にわけ、川東を1枚(小橋以東之図)に描いている。赤茶色は武家地、黄色は町人地、濃緑色は寺地を示し、道は朱色で描かれている。家臣の屋敷割が細かく記されており、家老名などから寛文期(1661~1673)頃の様子を描いたものと思われる。

6 下出石町惣絵図 (※T6-2)

1864年(元治元) 72.2×87.4

町内の砂場屋治郎吉が描いた略図。屋敷割と所有者名が記されている。東は旭川に面し、南には酒折宮(現岡山神社)があり、西は武家地、北は上出石町に続いている。

道路に面し、間口が狭く、奥行きが深い、町屋特有の屋敷割の様子がうかがえる。屋号を持つ商家が多く、木屋(材木商)、大工などが多いのもこの町の特徴である。

7 岡山城天守閣北面実測古図 (⊕T3-67)

230.0×300.0

8 岡山城天守閣東面実測古図 (⊕T3-68)

235.0×190.0

天守閣は宇喜多秀家によって1597年(慶長2)に完成された。明治の廃城後も残存し、国宝にも指定されたが、1945年(昭和20)6月29日の岡山大空襲によって焼失した。

三重六層の構造をもち、不等辺五角形の天守台に建てられているため、四方からの外観は均一でなく変化に富んでいる。最上階は三間四方で安土城と同じ大きさであった。

この指図では梁・桁・柱をはじめ唐破風なども細かく描かれており、往事の天守閣の姿をしのぶことができる。

9 御城内御絵図 (※T5-1)

1700年(元禄13) 230.6×194.4

岡山城本丸の建物配置および間取りを示す図。青鼠色が瓦葺き、薄茶色が檜皮葺き、黄土色は板葺きを示している。本丸は、本段と中の段からなり、本段には天守閣と御殿、中の段には表書院があった。本段御殿は藩主の私的な生活空間であり、表書院は藩主が公務を行う場であった。

表書院は、東南に玄関があり、内部は表・中・奥の三つの部分に分かれていた。表御殿には出仕の家臣が出入りし、政治が行われた。庭の南にあたるのが中の御殿。ここにあった能舞台は後に後楽園に移された。庭の北には南座敷があり、さらにその北に書院造りの招雲閣があった。最近発掘により、その遺構が確認されている。

10 御本段惣絵図 (※T5-17)

1860年(万延元) 156.1×212.4

岡山城内の最も奥の高所が本段で、近世前期には「^{てんしゅまる}殿守丸」と呼ばれていた(14-1参照)。ここに天守閣と藩主の生活空間である御殿があった。この図は、本段の建物配置と間取りなどを示したもの。黄色は瓦葺き、濃緑色は檜皮葺きであることを示している。

御殿の門は東南にあり、玄関から入ると留守居詰所・御用部屋があり、その東に大きな台所がある。御殿中心部には書院造りの一棟があり、庭に面して「^{ちやうしゅん}長春の間」があった。この北に居間・寝間が続き、中庭をへだてて北座敷がある。御殿の東部分には「^{ながつほね}長局」と呼ばれる建物が二棟並んでいる。内部は三疊の台所と六疊の居間からなる区画に分けられており、奥女中たちが居住した。

11 本段泉水見取図 (※T5-150)

79.3×55.0

1860年(万延元)の御本段惣絵図(10参照)にみられるように、本段御殿の西側に書院造りの建物に面して大きな庭があった。ただし、1700年(元禄13)の絵図(9参照)はこの空間に何の書き込みもない。この図は、その庭園の見取図で、石組や植生なども忠実に

写生されている。現在は築山のみが残っている。

12 牙城郭櫓実測図 (※T3-62)

26.7×720.4

岡山城本丸の門・櫓・蔵および天守などの立面図・平面指図を書き上げたもの。城郭の構造を詳しく知ることができるため、軍事機密とされ、藩の小作事方棟梁の手元に秘書として伝えられたのであろう。天守閣最上層の西側に神棚があり、祭神は天御神・武甕槌命たけみかづちのみこと・経津主命ふつぬしのみことであったと記されている。

13-1 岡山城郭図 (※T3-66)

1654年(承応3) 116.2×107.3

1654年(承応3)4月19日、岡山城の石垣の破損修復を幕府に願い出た時の絵図。西の丸から石関町への出口の北門にかかる土橋の端の石垣が、横3尺・ひらき1間にわたって崩れた。その個所が朱で示されている。

修復願の図は後に様式が統一され、同一の図(14-1参照)が使われるようになるが、この図は正保しょうほうの城絵図を元に作られている。櫓や門・塀などの様子がきちんと描かれている。

13-2 老中連署奉書 (※T7-157-2)

1654年(承応3) 40.6×56.3

幕府が岡山城の石垣の破損修復を願いの通り許可したことを伝える老中奉書。

14-1 備前国岡山城廻絵図 (※T7-73)

1708年(宝永5) 104.3×81.3

1708年(宝永5)11月に、岡山城の石垣の破損修復を願い出たもの。本丸内南方石垣他計21ヶ所の破損所は、図中に朱で示されている。元禄(1688~1704)頃から修復願に使われる城廻絵図しろまわりは、本図の様式に統一されるようになった。

なお、城内は、近世前期には「殿守丸」(本段)と「本丸」(中の段)とに分けて呼ばれていた(13-1参照)が、この頃には両者を合わせて「本丸」と称するようになっていた。

14-2 老中連署奉書 (※T7-73)

1708年(宝永5) 40.6×56.3

1708年(宝永5)11月晦日、石垣修復を許可する老中奉書。松平伊予守は池田綱政つなまさ。元禄(1688~1704)頃から、こうした修復願がしきりに出されるようになる。

15 岡山城地払下二関スル書類 (M3-215)

1889~90年(明治22~23) 24.5×16.6

関係書類の控等を綴ったもの。1889年(明治22)5月下旬に、旧家臣の石坂惟寛いしざかいかん(陸軍

軍医副総監)・花房義質(宮中顧問官)から、陸軍省が払下げの方針である旨、内報があった。これをうけて、同年6月8日に、池田章政から陸軍大臣大山巖に払下願が提出された。

16 城郭払下書類 (C11-12)

1889~92年(明治22~25) 23.8×16.1

関係書類の控等の綴。払下げ城地は、総坪数12万6432坪余で、天守閣・月見櫓などの建物も含まれていた。総評価額は、土地と建物を合わせて5,826円95銭1厘であったが、1890年(明治23)2月21日、金1万円で払下げと決った。ちなみに天守閣の評価額は441円であった。

17 岡山城郭千二百分一図 [内山下丈量図 (C11-11) のうち]

1890年(明治23) 76.4×68.6

払下げにあたり、岡山県庁から渡された内山下の実測図。

18-1 第三高等中学校医学部建物及敷地三百分一ノ図 (※T3-348-11)

1889年(明治22) 46.7×70.1

第三高等中学校医学部は、岡山県医学校を引き継ぐ形で1888年(明治21)4月に開校した。文部省では同年7月に陸軍省から西の丸の土地1万6615坪を借用、翌年(明治22)5月から新校舎の建設に取りかかり、90年(明治23)7月にほぼ完成した。この図は「明治22年1月製」とあるから設計図の写と思われる。

なお、池田家へ払下げられる見通しとなった90年(明治23)1月に、文部省から池田家へ永久無借料にて借用したい旨の内何が出されている(16参照)。

18-2 三宅貞久宛中村忠書状 (※T3-348-11)

(年未詳) 5月15日 16.2×48.9

池田家事務所の三宅貞久の依頼に応じ、敷地建物の300分の1の図を同封して送ることを知らせた手紙。復古同様のものであるが、坪数等は間違いのないから、御用に立つようであれば御入手して下さいとの内容。中村忠は第三高等中学校医学部の吏員か。

19-1 岡山城古写真(大納戸櫓・天守閣・内下馬門) (⊕Y1-84 8-(9))

目安橋外(南)側から本丸を望む。左手に大納戸櫓・内下馬門が見え、右手に天守閣が、その手前に表書院の式台(玄関)の屋根が見える。19-2とともに、多くの櫓や門が破却された1882年(明治15)以前の様子を写したものである。

19-2 岡山城古写真(太鼓櫓・大納戸櫓・重層多間櫓) (⊕Y1-84 8-(8))

本丸西外側南部の写真。右端に太鼓櫓、その左手に大納戸櫓、左端に伊部櫓、その左端に修覆櫓の一部、さらに櫓の間をつなぐ重層多間櫓が明瞭に写っている。